

南風原。

勝連城のお膝元、



勝連南風原エイサー

南風原エイサーは、戦後青年会の結成と同時に、創られました。勝連地区では他とはひと味違ったエイサーです。

パーランクー打ちは、紫の頭巾、黄色の帯、緑のウッチャキ（羽織）を身にまとい「エイヤーリ エイヤーサーサー」の掛け声をかけ踊り、女性の踊り手は浴衣を着て、エイサー歌曲に合わせて華麗に踊ります。全体的にゆっくりとしたテンポの多いのが特徴で、優雅さを基本としています。また、昭和57年には勇ましい赤野エイサーの曲を取り入れています。



南風原の獅子舞 (市指定／無形民俗文化財)



勝連南風原の獅子舞は、1726年に勝連間切地頭代前浜親雲上(カッチンパーマー)という優れた指導者が首里王府から村落移動の許可を取り付け、勝連城の南側傾斜地から現在地に村を移動した頃からムヌキ(魔除け)として舞われてきた民俗芸能です。

当初は定まった型はなく三線にあわせて舞うだけでしたが、1917年に旧具志川市田場の上殿内の指導を受け、現在の型が形成されました。舞い始めは、まずワクヤー(おびきだし手)が獅子を挑発しながら入場し、獅子を誘い出したワクヤーはすぐさま退場します。獅子は魔物と思っているワクヤーを取り逃がした不満を爆発させ、激しく舞い狂った後、退場します。

INFORMATION

勝連地区の位置

沖縄本島中部の東海岸、中城湾と金武湾の間にある勝連半島の南西半分と浜比嘉島、浮原島、南浮原島、津堅島からなります。



勝連地区の歴史

先史時代の遺跡は51カ所確認されています。遺跡は半島側では南側に多く、津堅島では海岸部に点在、浜比嘉島には洞穴内遺跡が多くあります。

勝連城10代目・阿麻和利の時代になると勝連は最盛期を迎えます。徳之島や奄美大島、さらに中国や朝鮮との交流も盛んに行われていましたが、中城城主・護佐丸と争いがおこり、後に中山軍に滅ぼされました。勝連間切は明治41年に市町村制の施行で勝連村となり、1980年に町制に移行しました。

2005年には4市町会議により、うるま市となりました。



沖縄県うるま市教育委員会

〒904-2226 沖縄県うるま市宇仲嶺175
TEL. (098) 973-4400

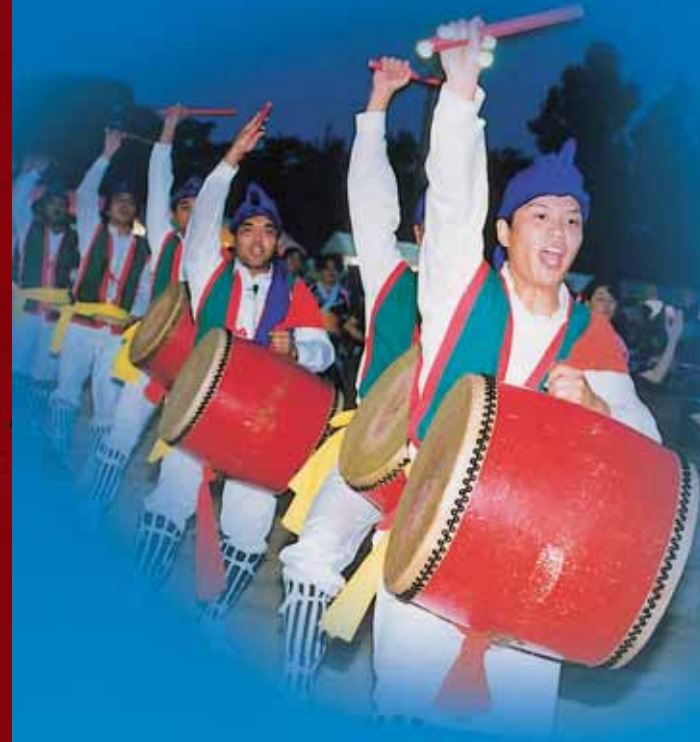
うるま市
文化財シリーズ 11



南風原 HAEBARU



沖縄県うるま市教育委員会



勝連南風原は、勝連地区の南西部、具志川地区と境を接した肥沃な地に位置します。昔は勝連村と讃えられ、勝連間切という名称もこれによったもので、いわゆる勝連同村です。社祿台帳に南風原のノロクモイは勝連ノロクモイとあり、南風原の地頭を勝連殿内と称えられていたことなどから考えても、勝連が南風原の古い名称であったことは間違いないと思われれます。阿麻和利の時代に南風原と改称されたと伝えられます。

南風原集落は、勝連城南側傾斜地の元島原に発祥したと伝えられ、一七二六年(尚敬王三四年)に、前浜三良(カッチンパーマー)の努力によって、現在の肥沃な地に移動しました。現在でも、村づくりの大神人として、南風原の人々は感謝して、報恩社を建て、祀っています。





- 民俗文化財・その他文化財
- 1 南風原の竈屋
 - 2 ナナカンジャラー石
 - 3 南風原の村獅子
 - 4 村屋跡(地頭代火の神)
 - 5 親田家刻紋石柱
 - 6 報恩社
 - 7 南風原ノ口殿内
 - 8 浜崎の寺
 - 9 クトジ御嶽
 - 10 按司墓

- 井泉
- 1 アガリガー
 - 2 マンナカガー
 - 3 イリーガー
 - 4 アシビナーのカー
 - 5 浜川ガー
 - 6 マーカーガー
 - 7 ヘンザガー
 - 8 ピーンガー
 - 9 門口のカー
 - 10 ヌールガー
 - 11 カンジャガー(仲間)
 - 12 ミートゥガー
 - 13 ウタミシガー
 - 14 アコーシガー
 - 15 タンハラガー(田原)
 - 16 ドウガー

遺跡

- 1 勝連城跡
- 2 勝連城下北貝塚
- 3 勝連城下南貝塚
- 4 南風原古島遺跡
- 5 南風原潮辺名遺跡

- 印は民俗文化財・その他の文化財
- 印は遺跡
- 印は井泉



南風原の文化財

1 勝連城跡



8 浜崎の寺

浜崎の寺は、区民の健康、子宝に恵まれることの祈願所です。また、普天間権現とのつながりがあるため、ここから普天間権現へのお通しもできます。内部には、石を置きビジュアルにしており、向かって右側は女シー(イナグシー)、左側は男シー(イキガシー)で、南風原ノ口殿内とのつながりがあるといわれています。なお、拜むときは、お香に火をつけず右側女シーを先に拜むことといわれています。



2 マンナカガー

マンナカガーは、集落の中ほどに位置しています。現集落には、その他にアガリガー、イリーガー、アシビナーのカー等があります。この四基は、築造技術や形態が良く似ており、村落移動した1726年頃の同時期に築造されたものと考えられます。



5 浜川ガー

浜川ガーは、絶世の美女真鍋樽(マナダルー)の頭髪を洗髪したことで有名です。真鍋樽は、勝連グスク7代目の城主浜川按司の娘で、彼女の黒髪は身長1.5倍もあり、竿にかけて洗ったという伝説があります。南風原村が、元島原にあった頃のウブガーでした。現在でも、毎年旧正月元旦に南風原及び近隣集落の門中によって、「カーウビー拝み」が行われています。



6 マーカーガー

マーカーガーは、元島原の大岩の下にある降りカー式の井泉です。宇の繁栄を願う拝所の一つで、元島時代のウブガーでした。神拝み時、このカーで手足を清めて勝連城内に登ったと伝えられています。

3 南風原の村獅子

サンゴ石灰岩を加工して作った素朴な獅子像です。村のフーチゲシ(邪気払い)として、南風原村が勝連城跡南側の元島原より移動した時(1726年)、村の境界として東西南北の4角に置かれたと伝えられています。今では北側と西側が残っているだけですが、集落の研究や民俗資料として貴重なものです。



9 クトジ御嶽

クトジ御嶽は、琉球国由来記に勝連間切の拝所として、「クト瀨嶽神名マネツカノ御イベ」と記録されています。旅果報、航海安全を願う拝所です。昔話では、中国から来た女性が、この御嶽の洞穴で子供を出産したと伝えられています。また、中国から品物を運んできた時は、まずはこの御嶽に置いてからグスクに運んだとも伝えられています。



勝連間切南風原村文書 (県指定/有形文化財・古文書)

琉球王国は、明治12年(1879年)の琉球処分によって沖縄県となりました。しかし、近代化への諸改革は本土よりはるかに遅れ、土地整理が完了したのが明治36年(1903年)のことです。それまでは王府時代の土地制度が存続し、琉球独特の地割制が実施されていました。勝連南風原には明治20~30年代に作成された地割関係の文書(冊子68冊、地籍図29葉)が保存されています。なかでも明治29年(1896年)の地割関係の文書は従来の土地制度関係史料には見いだせない新史料が含まれており、地割が農村において実施された具体的な過程を知る貴重なもので、近世、近代の沖縄の農村経済制度を知る重要な史料です。



5 親田家刻紋石柱

刻紋石柱は、親田家の庭の隣家境に立てられている、石灰岩製の石柱です。由来や意味は分かっていませんが、梵字や漢字、絵文字で文字が刻まれています。

6 報恩社



南風原村を移動する際、貢献した大恩人、前浜三良(カッチンパーマー)を称えるための社です。毎年、旧正月元旦に初御願を行います。

かっちゃん 勝連パーマー

勝連パーマーの代表的な頓智話「龍潭工事の昼の月」でも知られているように機知に富んだ人物として、数多くの逸話が残っています。勝連間切平安名に生まれた前浜三良は浜掟(はまうち)という役職にあったことから、勝連パーマー(カッチンパーマー)と呼ばれていました。

当時、現在の南風原地区を、不便な勝連城南方断崖の中腹から移動させたり、養魚場を設けて養殖の先駆者の役割を果たしたと伝えられています。伝説的な人物として琉球中に名を轟かせました。

4 南風原古島遺跡

勝連城跡の南東側の斜面地域に大きく展開するグスク時代の集落遺跡です。1986年に大規模な宅地整備が計画され、記録保存の発掘調査が実施されました。その結果、勝連グスクの麓に展開する集落の石壁遺構が発見され注目されています。また、城から分配された陶磁器類が多数出土しています。

